

## 闘病記

尾木 誠一

一九九八年一月十六日午前八時頃、ゴルフ出発寸前に予期せざる事が突然我が身を襲う。洗面所の壁に身体ごと叩きつけられ、左半身麻痺でしばし呆然自失。一人で救急車を呼び緊急入院。脳梗塞と診断（右脳に血栓）。右半身は異常なし、幸い言語障害もなかった。腕を固定して二十四時間体制の点滴の十日連続。無気力に呆然とベッドに横たわるだけ。これからどうなっていくだろうか。果たしてなおるだろうか。不安の毎日。

握力左四十五からゼロまで低下。三週間後に松葉杖で退院。日常生活もままならず。約二年リハビリ生活変化なし。苦悩、あせりの連続。最悪右が使える大丈夫と開き直るしかない。脳梗塞の原因はゴルフの練習のやりすぎの疲労蓄積、水分不足、ストレスと考えられる。

ある日ふと小指と手のひらの間に小さな隙間を見つけ、この穴に箸を差し込み

放置順に大きくしてまた放置の繰り返し続けること二年やつと左指が開いたうれし涙が止まらないが次の瞬間、指に感覚なく動かない右手で左の指を一本根気よく曲げようと努力を重ね約一年で反応し始めやつと普通に折り曲げが出来た絶対動かなかった脇が偶然あくびすると勝手に上がり、終わると元に戻るわけがわからないどうして何故？医師もわからないというあくびした瞬間に脇に厚めのクッションをはさみこみ、そのまま生活を続けるうちにいつの間にか自力で上げ下ろし出来だした足も並行して回復とにかくうれしい数年後には左腕全体に少々違和感が残るが、視力も戻り外見ではほとんどわからないうまで回復努力もさることながら運にも恵まれた感謝紆余曲折しながらゴルフしたい執念で、長い年月をかけ奇跡的に克服

二年前山下隆三君の手助けもあり苦節十年夢にまで見た待望のゴルフができたよく頑張ったと褒めてやりたい

松浦先生ご自宅で、よくここまで元気になったねと涙ぐんで何度も力強く握手してくれた昨年友人の見舞い時に細木病院のリハビリ室で偶然先生と再会

言葉と足は不自由ですが顔色も良くお元気そうまた私のネクタイを大変気に入られて何度も手に取り嬉しそうな顔が素敵このような笑顔を入院以来あまり見

たことないと奥様から感謝される 謹んでご冥福をお祈り申し上げます

左腕にいまでも多少後遺症が残るがお陰様でなんとか人並みの生活もでき、たまにはゴルフも楽しんでいたが今年正月早々突然に腰と太ももに強烈な痛みが長く続き、自力歩行困難のため一か月あまり入院 腰部脊柱管狭窄症 またまた試練が襲う 現在徐々に快方に向かうが、未だに歩行に不自由 だがくじけない 必ず人並みに歩くぞ ネバーギブアップだ 狭窄症、閉塞性動脈硬化症、慢性腎不全の持病で不安だが六十周年記念にはぜひ出席したい 過去をどう生きて来たかは問題ではない 今後どのように生きていくかが大切 助かった命を大切にし、生きていることに感謝し、何事も前向きに頑張ってきた。

※ ホールインワン 一九八三年高知ゴルフ月例杯

(同伴者 吉本功、山本禎一、大原敬司)

